令和二年度
勿来高だより
第六号　令和二年長月二十八日発行

無念！修学旅行中止

今年度第二学年の修学旅行は、十月二十七日から三泊四日で沖縄へ行く予定でした。

私としては、沖縄県知事より修学旅行を歓迎するとの文書が届いていたこともあり、七月末まで沖縄への修学旅行を実施するつもりでいました。

沖縄というとリゾート観光のイメージが強いですが、修学旅行としては第二次世界大戦の戦場となった沖縄での平和学習がメインとなります。コロナ禍ではありましたが、七月時点での沖縄の感染者数がそれほど多くなく、一定のリスクを考慮しても平和を学ぶに値する場所だと判断をしていました。

しかしながら、八月になり沖縄県の感染者数が急増。本県の感染状況とともに、沖縄県の感染状況を日々チェックする夏休みを過ごすことになりました。

感染者急増による沖縄の医療体制の逼迫等の報道もあり、五十人程度の団体ながら、様々な面でのリスクが増大し、最終的に中止の決断に至りました。

写真は、ホームルームでの平和学習の様子です。資料を使っての学びに変わってしまいましたが、学ぶべきことは学ぶという姿勢は続けたいと思います。

リアルな面接練習

生徒が使う言葉の一つに「リア充」というものがあります。広い意味では現実の生活が充実しているということらしいのですが、現実以外に充実する生活があるという観念がそもそも私には理解できません。

今月二十五日に行われた模擬面接指導は生徒風に言えばリア充面接指導だったに違いありません。

いつもなら教員が面接官役となりますが、この日は就職面接を熟知している外部講師が面接官役です。さらに、写真のように、他の生徒が見ている前で質問に答えていかなければなりません。聞いている生徒も講師の指導を熱心にメモしています。

私が指導した生徒に順番が回ってくると、まるで私が指導を受けている気分です。発声指導をした生徒が褒められればガッツポーズ。満点回答まであとちょっとと聞けば、申し訳ない気持ちになります。

私にとっても「リア充」な時間となりました。

教員も学び合い

いわき支援学校くぼた校と校舎を一つにしている利を生かし、生徒同士が交流する様々な機会が本校にはあります。

それなら教員もと言うことで、先日、くぼた校の研究授業に参加しました。通常ならば、研究発表会のような企画がないと、学校種の異なる授業を見ることはできないのですが、校舎一つの二校はそれぞれが指導案（授業計画）を交換するだけ、簡単です。

写真は短歌の授業風景です。生徒に授業の見通しを持たせるため、黒板に授業の流れを明示しています。なるほど。

くぼた校の先生も本校の研究授業に参加します。教員も学び合いが大切ですね。

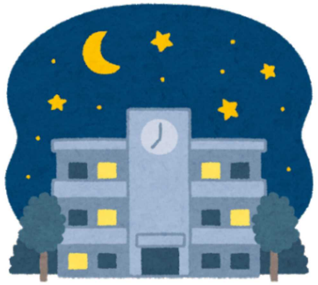
連載小説　自動ドア　第四回

仙田ノモ

しばらく聞いていて、何の音だろうなって思ってた。で、はっとした。

事務室の前の正面玄関に、先生方が使う下駄箱があるだろ。今度見てごらんよ。その下駄箱にはさ、君たちの下駄箱と違って扉がついてる。薄い金属製の扉だよ。カシャ…カシャっていう音は、ちょうどその扉を開けて閉める音にそっくりだったんだ。

その音だと思って、私はしばらく身動きできなかった。怖かったんじゃないよ。いや、こわかったっていってもいいかな。ただし、幽霊が怖かったんじゃない、だれか侵入者がいるんだと思ったんだ、生きてる人間のね。誰かが、下駄箱を荒らしてると思ったんだよ。



そこで、ばたばたと懐中電灯を探し手近にあった棒を持って、廊下に出た。懐中電灯を探している間にカシャ…カシャっていう音は聞こえなくなったけど、まだ、犯人はいるかもしれない。そっと正面玄関まで行ったよ。

正面玄関には誰もいなかった。下駄箱も荒らされた形跡はなかった。考えてみれば、先生の上履きの入ってる下駄箱を荒らすって、お金にもならないことをするやつはいないよね。何か別の音の聞き間違いだろうと思って、職員室に戻ったんだ。もうカシャ…カシャの音はしなかった。明日までの報告書をしあげないと、とんだ時間をロスしちゃった。そうおもってまたパソコンに向かってカチャカチャ打ち始めた。

（続く）

校長のつぶやき

大学時代、友人たちと九州旅行を企画して、最終日は長崎でした。原爆資料館に観光気分のまま入館しましたが、出口につくときには全員が押し黙り、中には涙を流す友人も。ものの数時間で、思考の根幹をなす概念（観）が変わるという衝撃的な体験でした。

昨年は、同じ体験をして欲しくて、娘を連れて広島の原爆資料館を訪れました。

修学旅行は中止になりましたが、生徒諸君には、沖縄でも、長崎でも、広島でも、近くは東京にある資料館でも、ぜひ若いうちに訪れてほしいものです。

（本紙中のイラストは「いらすとや」WEBよりお借りしています。）